

国勢調査員とタタルスタンの村に行く —2010 年全露国勢調査現地報告

桜間瑛（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）

2010 年 10 月、日本では 5 年に一度の国勢調査が行われた。奇しくも、それと時をほぼ同じくして、ロシアでもソ連崩壊後 2 度目となる国勢調査が行われていた。

ちょうどタタルスタン共和国カザン市に留学中であった筆者は、その進行の様子を直に見ることができた。筆者の関心は、クリャシェンないし受洗タタルと呼ばれる人々の民族的な自己認識であり、それが顕在化する場としても、この国勢調査に注目していた。ここでは、その様子を紹介しつつ、そこから見えてくる現在のロシアの生活の一端も紹介したいと思う（なお、カザン市については、先にその滞在記を記しているのので、そちらも参照されたい¹⁾）。

2010 年の国勢調査の実施はすでに早い段階から決まっており、2007 年から実施に向けての本格的なプロジェクトが進められていった。しかし、ちょうど筆者が留学生活に入った 2008 年の秋、金融危機がロシアにも波及するに及び、この国勢調査の延期が噂されるようになった。実際に、前回の国勢調査は当初 1999 年に行われる予定であったが、98 年に起こったロシア経済危機の影響で延期を繰り返し、ようやく 2002 年に実施されることになったという経緯がある。しかし、プーチン首相らはこれを噂に過ぎないとしてすぐに打ち消し、むしろ調査員を雇用することによって失業者対策にもなるとして、実施のための準備が着々と進められていった。そして 2010 年に入ると、調査の詳細や、その準備の様子が報道されるようになっていった。

日本同様、ロシアにおいて最も危惧されていたのは、調査を拒否する人が続出するという事態であった。2006 年に「個人情報についての連邦法」が制定され、それを盾に、特に民族的な帰属に関する項目を中心に調査に対する回答を拒否する人が出るのではないかと考えられたのである。

このため、調査実施が近づいてきた夏ごろから、国勢調査の必要性を強調し、それに積極的に協力することを呼びかけるような報道が現れてきた。また、実際に各戸を訪問して

¹ [カザン滞在記](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/casia/09sakurama.pdf) (<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/casia/09sakurama.pdf>)

調査を実施する調査員についての報道も逐次なされていった。調査員には、都市部では主に学生が、村落部などでは当地の役所関係者などが任用されていたらしい。彼らに対しては、数度のレクチャーが行われると同時に、調査員であることを示すための特別仕様のマフラーや名札、鞆が支給され、その様子もテレビなどで積極的に報道された。



また、町中を見ても、「ロシアにはみなさんが重要なのです！（**России важен каждый!**）」というスローガンを掲げた看板が目立つようになってきた。カザン市内で見かけた看板では、ロシアをかたどった空間に、老若男女、様々な民族の衣装を着た人々の写真が

映し出され、ロシアの多様性を示すとともに、それぞれがロシア国民として、この調査に参加すべき、ということが表象されている。調査開始を翌日に控えた13日には、筆者の携帯電話に国勢調査委員会から、調査の実施を告知し、参加を呼び掛けるSMSまで送られてきた。このような準備を経て、10月14日から25日にかけて、国勢調査が進められていった。

この国勢調査期間中、筆者は2つの村落部で現地調査を行った。その目的の一つは、国勢調査がいかに進み、なかでも民族的な帰属に関する回答がどうなっているかをみることであった。そこで、前半の10月13日から17日にかけて滞在した村では、宿泊のお世話にもなっていた村ソヴィエトの代表にお願いし、あっさりとして快諾を得て、一日調査員と一緒に村内を回り、調査の実態を間近に見ることができた。

この村（H村）は、人口約700人で、150戸ほどという中規模の村であり、近辺の3つの小村落とともに形成する自治区域の中心となっている。地域的には、隣のチュヴァシ共和国と接していて、民族文化・言語の面で、タタール、チュヴァシ双方の特徴を持った人々が住む場所とされ、民族学的な関心が集まる場所である。

国勢調査の実施に当たっては、H村と自治区域のうち小さな2村を一単位として、代表1名、調査者2名が任命されていた。そして、H村の村ソヴィエトの事務所の隣の部屋が、調査本部に充てられ、代表は基本的にここに控えている。回収済みの調査票も一度ここに

集められ、記入ミスなどの確認などが行われる。調査員の一人は、最も人口の多い H 村を担当し、もう一人は別の 2 村の調査を担当して各戸を回り、調査を進めていった。

10 月 15 日の朝 10 時に筆者は国勢調査本部に赴き、調査員とともに調査に出発した。この調査員は地元の人物で、調査初日であった前日 14 日は、まだ調査の手順が不慣れ、ということで自分の親戚を中心に近しい人から周り、14 家庭を済ませたという。2 日目であるこの日は、村の中心通りの家を順番に回った。とりあえず、最初に訪問する予定の家に電話で在宅の確認を取って出発した。

秋の雨が降って、ぬかるんだ道を進み、番犬に注意しながら最初の家の敷居を跨いだ。「国勢調査に来たよ」といいながら中に入ると、家人は「調査員ならパスポートを見せろ」と冗談を言いつつ、すぐにテーブルに招き入れてくれた。先に主人の方から、自分のパスポートを見せないといけないか？ということ聞かれるが、それは必要ないということで、すぐに調査にはいった。

この調査は、調査員が聞き取りをし、回答を調査員の手で書きとめていく、という形で進行する。これは、特に非ロシア人の高齢者などで、ロシア語の読み書きができない場合を想定してのことであろう。実際、筆者が滞在していた村は、自身の研究対象であるクリャシェンないし受洗タタールと呼ばれる人々が住民のほぼすべてを占める村で、村人との日常会話はほぼすべてタタール語で行われている。むろん、みなある程度はロシア語を知っているが、高齢者はあまり上手に話せないのを恥ずかしがり、ロシア語で会話するのを嫌がる人もいる。そして、後にも触れるように、高年齢の人になると教育レベルも決して高くはなく、こうした調査に対応できるような識字能力を必ずしも期待はできない。連邦で用意している調査票には、むろんロシア語で設問が用意され、ロシア語で回答を記入することになっているが、この村の調査は、調査員がすべてタタール語に翻訳し受け答えをしていた。



一軒目の家庭では、家族全員がそろっていて歓迎してくれた。調査前の政府側の懸念をよそに、筆者の見る限り、この村での被調査者側の反応はおおむね良好で、どちらかとい

うと調査そのものを楽しんでいる風であった。村落地域になると、特に夏の農作業などが終わると、生活も単調になりがちである。そうした中では、国勢調査などでも、自らの生活を改めて振り返りつつ、人と話をする興味深い機会なのであろう。ただし、この日回ったうちでは、一人、2軒目に回った独り暮らしの老年の女性からは、非常に気乗りのしない様子で回答している様子が伺われた。この家を出た後、調査員の方が言うには、特に老年の信仰心の篤い人の中では、こうした世俗的な調査や選挙などに参加することを、宗教的な罪として忌避する傾向があるという。ちなみに、この家のテーブルには、多くのアイコンが並んでいた。こうした人々の存在を意識したのか、その日の夜のニュースでは、様々なところで国勢調査が行われたという報道のなかに、モスクワおよび全ロシア総主教キリルが、調査を受ける様子が流された。

個別調査票1枚目（П1）：上半分、3問目までが家の造りに関する質問、下半分の4問目がガスなどの設備についての質問になっている。

ところで、今回の国勢調査では、戸別調査票・常住者用個人調査票・一時滞在者（外国人）用個人調査票の3種が用意され、各家庭で戸別調査票一つ、居住者の人数分の個人調査票を出して各項目を聞き取り、書き記していく手順になっている。

戸別調査票では、家の種類や造りに始まり、ガスやトイレなど家の設備についての質問がなされ、最後に家族構成が問われる構成になっている。家に関しては、すべて一戸建ての個人住宅であるが、調査に同行して見た限りでは、80年代から90年代に建てられたものが多かったように感じられる。もっとも、筆者が留学・調査中に見た限りでは、100年近く前に建てられたといわれる家というもの、それほど珍しいわけではない。また、家屋内の設備については、タタルスタンは産

油地域ということもあり、ガス管は領内のほぼ全地域に張り巡らされており、古い造りの家であっても、ガスによる暖房設備などは大体整えられている。他方、上下水道の整備はあまり進んでいない。この村でも、下水の整備は整っておらず、トイレは庭に置かれた高床式の小屋で、床に穴が開いているだけのものというのが専らである。一方で、通信網の整備は進んでおり、村の生活の主要な娯楽ともいえるテレビは、多くの家庭で衛星放送までひかれており、さらにインターネットの整備も進んでいる。

そうした中、この日調査で訪れたなかでは、一家庭だけ水洗のトイレやバスタブが設備されている、という回答があった。一見したところ、調査に入ったその家はかなり古く、どちらかという打ち捨てられたような印象を持った。このため、筆者は不思議に思いつつ調査を見守っていたが、一通り質問を終えた後に言うことには、新しい家が建築中でそちらの話だという。調査後、裏手にあるその家を見せてもらったところ、確かにこぎれいな作りで、バスタブやトイレが室内にきちんと設置されていた。この家の主人は第二次大戦に参加した退役軍人で、国からの補助事業として、こうした家が作られているという。今年（2010年）は、対独戦勝65周年を記念する行事や事業が大々的に行われる中で、国を守った人々に対する関心も再び高まっているように感じる。

こうした一連の家庭に関する質問がおおよそ20分で終わったのち、その家に居住している各人に対して、個人票に沿った質問がなされていく。その内容は、家族内での続柄に始まり、次いで各人の出身や民族、教育などについての質問が続き、おおよそ一人当たり10～15分ほどで進行していく。

出身は、共和国・州レベルで回答することになっており、この村の場合、ほぼ全員がタタルスタン（ないしその前身のタタール自治共和国）であった。ただし、先にも触れたように、ここはチュヴァシ共和国と接した場所に当たるため、そちらの村から嫁いできた、という女性が一人だけ、チュヴァシ自治共和国出身と回答していた。

民族、言語についても、そのチュヴァシ自治共和国出身の女性のみ、「チュヴァシ」と回答したが、残りは全員が民族籍を「タタール」、母語を「タタール語」とされていた。ただし、この村の住民はより細かく見れば、クリャシエンないし受洗タタールと呼ばれる人々で、実際にそれを回答した人もいた。しかし、調査員は「それもタタールだから」として、「タタール」と記入していた。すでに調査以前から、この民族籍についての問題は広く議論されており、回答者の自己意識を最大限に尊重し、その言うままに記述することという

のが原則とされた。調査票自体にも「ロシア憲法第 26 条に則り、自己意識によって」という注意事項が書き込まれていたが、ここでの様子を見る限り、こうした注意が十分に反映されているとは言い難い²。また、ロシア語使用については、高齢者層だとあまり知らないからということ、「使えない」という回答をしている人も見受けられた。一方で、そうした層では逆にチュヴァシ語ならわかる、という回答があり、タタルスタン共和国を含む沿ヴォルガ地域が多民族・多言語空間だということを改めて実感させられた。

また、教育についての項目への回答をみると、年齢層が下がるほどに高学歴化しているような傾向が看取された。戦前生まれの高齢な人だと、初等ないし中等教育までが多くを占めるのに対し、50～60 年代生まれになると専門学校などを卒業している人が増えだし、筆者と同年代ぐらい（30 前後）になると、大学などの高等教育を卒業している人の割合が増えているように見える。別の項目で現在の居住地に来る前に住んでいたところはどうという問いに対し、「中等・高等教育を受けた**」という回答が目立ったように、こうした傾向は世代ごとの移動のあり方にも影響していることが考えられる。さらに、移動については、男性の場合「徴兵されたときに行った**」という回答も目立ち、徴兵という機会が、社会的な移動としての意味も持っていたことが伺われる。

しかし、現状では一度村を出た若者が再び戻ってくる、ということは難しい状況にある。村人自身、しばしばそれについて「仕事もないから」と言っている。それは、今回の国勢調査の様子を見ても、収入に関する項目で、(失業や傷病を含めた)「年金」と回答した人の割合が多かったように感じられた点にも表れている。また、わずかな雇用の口である学校の先生なども、その収入は決して恵まれたものではない。今回の国勢調査における調査員の平均の報酬は、5500 ルーブル (約 15000 円) とされており、モスクワなどの基準で考えると、交通費を考慮すると少ないといわれている。しかし、村におけるその他の職での収入と比べると、大差ないものとなっていて、ここに現在のロシアにおける村・地方と町の格差の大きさがかなり明瞭にあらわれていると言えよう。

このようにして、この一日では 12 軒、約 30 人の調査を済ますこととなった。一度、家

² 地域によっては、これを問題として強く主張するようなものもあったと聞いている。実際、冒頭で述べた様に、筆者の中心的な関心も彼らの民族的な自己認識であって、国勢調査におけるこうした動きは大変重要な問題である。ただし、それがゆえにあえてここではその問題に深く言及することはせず、稿を改めて論じる機会を持ちたい。さしあたり、前回国勢調査での議論については、拙稿を参照されたい (桜間瑛 『受洗タートル』から『クリャシェン』へ—現代ロシアにおける民族運動の様態— 『スラヴ研究』第 56 号、2009 年、127～155 頁)。

の敷地に入ろうとしたときに犬に襲われかける、というようなことはあったが、概ね順調に進んだように思われる。筆者自身、自らの調査の過程で、特に個人票にあるような項目について個別に聞く機会があったが、このように改めて集中的に聞いて回る機会に同行したことは、村の様子を知る上で有益であった。また、戸別調査の内容も、これまで漠然と村に関して持っていたイメージなどを再確認するようで、興味深く回ることができた。一方で、現行の国勢調査がその制度上、調査員の書き方一つで、結果が左右される側面があることも目の当たりにすることができた。しかし何よりも印象的なのは、先にも述べた様に、決して楽とはいええない経済状態の中にあっても、調査員やそれに連れ立つ（謎の）外国人に対してさえ、常に客人として接し、お茶まで出してくれるようなホスピタリティであった。これは、自身の調査の過程でもしばしば直面することで、そうした心の豊かさも、改めて確認することとなった。